

# 六花

2010

平成22年

俳句雑誌りっか

Cover designed by Little Bird

2月号

山田六甲

は 灰 降るや左義長に星整ひて  
る 流<sup>る</sup>紗<sup>し</sup>那<sup>な</sup>仏<sup>ぶつ</sup>怒り肩なる雪  
は 針供養磁石で土を探りをり  
あ 味苦く鍋に白菜足しぬたる  
け 毛糸脱ぐ闇に火花を放ちつつ  
ぼ 牡丹鍋笹搔牛蒡ふんだんに  
の 伸し餅の形整ふ当木かな  
や 山水に鼻濡れぬたる冬の鹿  
う 牛の舌ぐつつぐつ煮込む寒の入り  
や 山風に痩せて氷れる雪まろげ  
う 鶉の去りし巖は寒の波かぶる

し 猪垣の戸板に角を当てし痕  
ろ 櫓を足であやつりながら海鼠突く  
く 熊肉や余呉湖の宿の垂雪  
な 菜を雪の畝深く掘り当てにけり  
り 猟犬の前のめりなる鎖かな  
ゆ 揺椅子に本の伏せある暖炉かな  
く くるぶしを伝うて来たる春の雪  
や 山羊の乳湧きこぼれきて寒の入り  
ま 黒鯉まじい吐く口髭に寒戻りけり  
ぎ 銀嶺を遠くに凧を飛ばしけり  
は 灰搔いてどんどの熾に竹の爛

う や う や の ぼ け あ は る は  
馬の背に粉雪積もりをりにけり  
柳揺る雪の雫の落つるたび  
浮き咲ける臘梅仰ぐばかりなる  
闇深む紅梅に色被かむせつつ  
濃艶に日影に開く椿かな  
木刀の黒光りして冴返る  
谿谷の音がうがうと寒の月  
暁あかときの夢より覚めて見る紅梅  
母の指くはへて寝る児春隣  
瑠璃色を潜め流るる雪解水  
掃きながら集めてゐたる落椿

し 白息に指先紅を帯びにけり  
ろ 臘梅に透きとほりゆく空の果  
く 黒々と雪に埋もるる落椿  
な 流れゆく風花にみる光かな  
り りゆうりゆうと吹雪にしなる枯枝かれえかな  
ゆ 湯に入りて雪の垂りをみてをりぬ  
く 櫛通す雪に乱れし長き髪  
や 槍先の如くに寒の戻かな  
ま 薪を積む背越しに息白かりき  
ぎ 銀山を戴く湖に寒の月  
は 針先に寒の戻を計りをり

# 熟柿踏み顔歪ませて人のゆく 小寺ふく子

じゆくしふみかおゆがませてひとのゆく こらふくこ

うとうとと犬の昼寝や石落日和

一日毎山装ひて空の青

夕闇に白くつきりと姫椿

柊の白き小花が香をこぼす

食べると美味しい熟柿だが、踏みだ感触が、別のものを連想させて気持ち悪くなった。顔を歪ませ靴底の又ルヌル感を引きずりながら歩いて行く。その様子を見ている者もまた熟柿を踏んだような気分になったのである。しかも読者に直通で熟柿を踏んだ不快感が伝わってくる。それは強い句のエネルギーがあるから、また熟柿を踏む前、この人はどのような顔をしていたのだろうか、歪んだ顔は女性なのだろうか、男性なのだろうか、年齢は？とあれこれ想像をかきたてられる。この句動詞が多用されて見事な不満が残るが人間の心理を鋭く見事に突いた句である、六花集上位ではないが、句が突出しているので推薦した。

鳩 車

梶浦玲良子

一条の轍に風の法師蟬  
秋しぐれ弔旗いちにち村を守り  
蝸螂の考へてゐる餌かな  
数珠玉つなぐ時ゆるやかに流れけり  
こほろぎの跨つて来る鳩車

霜の花

貝森光洋

パリーでは枯葉が空をかき鳴らす  
毛糸編む手を止めて目を合わす  
霜の花神の御業のほかはなし  
次々弟北風小僧の寒太郎  
父母は田舎の小春日育ており

せつ じゅう しゅう  
雪 樹 集

秋澄む

筒井八重予

冬ぬくし風なき木洩日の中に  
秋澄むや水に二重の色の木々  
くもの巢に掛かりて終の柿落葉  
小夜時雨ありしや朝の雨戸繰る  
柚子湯にともらひし柚子の香り立つ

壺庭

志方 章子

タンカーは秋の入日の帯の中  
坪庭の石露の葉に秋灯かな  
名月のふたたび雨を払ひけり  
曼珠沙華入日の方へ傾ぎけり  
大瓶がびんの割れ目に秋の草となる



# 螢雪譚 六甲

蠶螂の考へてゐる笹かな

梶浦玲良子

蠶螂とはカマキリ。その仕草は賢人がものを考へてゐるよう  
に見え、逆にその無性の荒さやどんな敵にでも立ち向かうの  
で、「竜車に向かう蠶螂の斧」という表現がうまれた。その  
ギヤップが人間世界に親しみを持たせ、風流人の好奇心をそ  
そる小動物である。気性が荒いと言つたが、決して彼の方か  
ら攻撃を加えてくるわけではなく、大抵は人間が悪戯を仕掛  
けたときに限つて防御の鎌を持ち上げて身構えるのみであ  
る。勿論生きてゆくため糧を得る時には鎌を使う。さて蠶螂  
が首をひねっているところへ人声か、里の生活音かが笹と  
なつて返つてきた。蠶螂がその笹に反応しているかに見える  
のも絵になる仕草である。どこか愛嬌があつてまた、孤高の  
雰囲気醸している虫なのである。

# 六花集 会員作品

燈火親しみ再々読の周五郎

平居 濤子

瀬戸物の神馬が小屋に神の旅

草の絮平城宮址の空覆ふ

忌日にて始まる十一月長し

紅葉せる木を守るごと杉木立

五ヶ瀬川流一

大仏の掌に肩に乗る煤払ひ

初明かり大地の鼓動疑はず

初明かり命かがやかせて生きよ

身に纏ふ小春日和となりけり

老の身に小さき春のめぐりかな